

3. 活動内容

キックオフシンポジウム

日 程: 2021年3月30日(火) 9:30~12:20

場 所: ハイブリッド式(対面+オンライン)実施

会 場: 九州大学伊都地区ウエスト1号館4階IMIオーディトリウム

令和3年3月30日、本プログラムの開始を記念したキックオフシンポジウムを、対面、およびオンラインのハイブリッド形式で開催した。本プログラムの取り組みを広く周知するとともに、各界からの意見を本プログラムに生かすことを目的としたこのキックオフシンポジウムには、プログラム生やプログラム担当者をはじめ、国内外の大学・企業の方々など、約150名の参加があった。

石橋達朗総長による開会挨拶後、来賓として文部科学省の西明夫大学振興課大学改革推進室長からプログラム生へ向け、「社会的課題の解決・新たな知や価値の創造に挑戦してください」とのメッセージをいただいた。シンポジウムでは、卓越大学院連携先機関の産業界の関係者や、プログラム担当者が講演。山田武士氏(NTTコミュニケーション科学基礎研究所長)が『人間科学と数理科学の共創=コミュニケーション科学』、寺本振透教授(法学研究院)が『実務法律家の仕事と、数学的なモデル』、穴井宏和氏((株)富士通研究所シニアマネージャー)が『マス・フォア・イノベーション卓越大学院への期待』と題してそれぞれ講演いただいた。どの講演も、“数学がなぜ社会で今必要とされているのか”ということが、学生らを含めて聴衆に強く伝えられた。

九州大学 マス・フォア・イノベーション 卓越大学院 キックオフシンポジウム

本大学院プログラムでは、数学・統計を基盤に、数学をデザインで異分野と共創しイノベーションを創出する卓越した数学人材を育成します。
2021年4月より本格始動!

日程: 令和3年 3月30日 (火) 9:30~12:20
実施形式: ハイブリッド式(対面+オンライン)実施
会場: 九州大学伊都地区ウエスト1号館4階IMIオーディトリウム
参加費: 無料
定員: 対面20名、オンライン500名

プログラム

9:30~	開会挨拶	九州大学総長 石橋 達朗
9:35~	挨拶	九州大学理事(副学長) 谷口 慎一郎
9:45~	来賓挨拶	文部科学省高等教育課大学振興課大学改革推進室長 西 明夫 氏
9:55~	挨拶	イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校 教授 Yuliy Baryshnikov
10:05~	卓越大学院プログラム 概要説明	プログラムコーディネーター 佐伯 修 (九州大学マス・フォア・イノベーション研究所 所長)
10:40~	講演 1	『人間科学と数理科学の共創=コミュニケーション科学』 NTTコミュニケーション科学基礎研究所 所長 山田 武士 氏
11:10~	講演 2	『実務法律家の仕事と、数学的なモデル』 九州大学大学院法学研究院国際関係法学部門 教授 寺本 振透
11:40~	講演 3	『マス・フォア・イノベーション卓越大学院への期待』 株式会社富士通研究所 人工知能研究所 シニアマネージャー 穴井 宏和 氏
12:10~	閉会挨拶	プログラム責任者 長田 博文 (九州大学大学院数理学部 数理学系 教授/九州大学大学院数理学部 学部長)

九州大学マス・フォア・イノベーション卓越大学院のホームページ
(<https://www.gpmi.kyushu-u.ac.jp/>)
またはこちらのQRコードからお申し込みください。

九州大学理学部数理学部マス・フォア・イノベーション卓越大学院事務室
電話番号: 092-802-4355~4360 E-mail: gpmioffice@imu.kyushu-u.ac.jp

キックオフシンポジウムポスター



左から長田プログラム責任者、谷口理事、石橋総長、佐伯プログラムコーディネーター



佐伯プログラムコーディネーターによる説明

III 活動記録

General Meeting

日 時: 2022年1月25日(火)9:00~10:03 ※日本時間

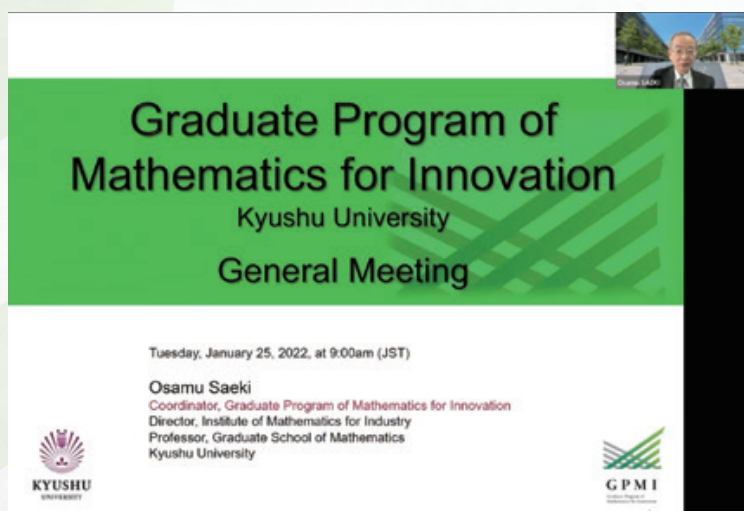
場 所: Web開催

出席者: 56名

卓越大学院プログラム担当者全員による第1回目の会議として、General Meetingが、令和4年1月25日(火)にオンライン形式で行われた。プログラム担当者84名のうち学外のプログラム担当者を含む56名の参加があった。使用言語は英語とし、主にプログラムの進捗状況を共有し、プログラム担当者全員による意識合わせをするとともに、今後の活動内容、課題等について意見交換を行うことを目的として開催した。

まず、プログラムコーディネーターからプログラムの内容や進捗状況についての説明があり、その後、自由に質疑応答を行った。イリノイ大学アーバナ-シャンペーン校のバリシュニコフ教授より、同大学への留学について、2022年の後半もしくは1年後を目途に準備を進めてはどうかとの意見があり、これに対しプログラムコーディネーターより、留学については新型コロナウイルスの感染状況を見ながら準備を進める旨説明があった。ラ・トロブ大学のジャクソン教授より、本プログラムと類似しているラ・トロブ大学の取り組みの一例として、オーストラリア政府が、オーストラリアで博士号を取得する学生に対して、博士課程の中でインターンシップを行うための奨励金を出していることが挙げられ、本プログラムへの期待も述べられた。これに対し、プログラムコーディネーターより、農学が盛んで統計学も強いラ・トロブ大学への留学は、学生の語学力向上だけでなく、研究の成果に繋がるのではないかと発言があった。ジャクソン教授より、ラ・トロブ大学では数理科学や計算機科学の分野で農業と交流があり、その分野においてIoTの動きが大きく、応用数学の交流の機会が多くあると考えている旨発言があった。また、梶原教授より、現在マス・フォア・インダストリ研究所で統計部門の新設を進めているため、統計の分野でもラ・トロブ大学とは連携し合えるのではないかと発言もあった。

今回はこのように、特に海外のプログラム担当者や連携先機関と有意義な意見交換を行う機会となった。



長田プログラム責任者



佐伯プログラムコーディネーター



梶原教授



ジャクソン教授



バリシュニコフ教授

グローバルアドバイザリーボード

日 時: 2022年3月25日(金) 9:00~10:13 ※日本時間

場 所: Web開催

出席者: 大阪大学工学研究科 附属アトミックデザイン研究センター 教授 浜口 智志

Distinguished Research Staff Member and Manager, Computational and Statistical Learning, Foundations

of Trustworthy AI, IBM T. J. Watson Research Center 安倍 直樹

Principal Research Scientist, Amazon.com, New York Jonathan Hosking

大学院数理学研究院 長田 博文研究院長(プログラム責任者)

マス・フォア・インダストリ研究所 佐伯 修研究所長(プログラムコーディネーター)

マス・フォア・インダストリ研究所 白井 朋之教授

マス・フォア・インダストリ研究所 梶原 健司教授

大学院システム情報科学研究院 竹内 純一教授

大学院経済学研究院 小室 理恵准教授

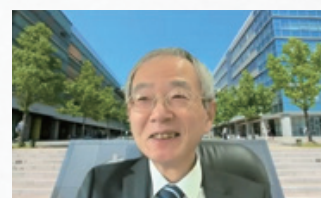
国内外の有識者に、本プログラムの内容や活動などについて説明し、プログラム改善のための助言をしていただくことを主な目的として、令和4年3月25日(金)に、本プログラム第1回目のグローバルアドバイザリーボードをオンライン形式で開催した。グローバルアドバイザリーボード委員5名のうち、3名の方に出席いただき、プログラム側から6名が参加して、英語にて開催した。まずプログラムコーディネーターから本プログラムの説明を行った後、自由に意見交換を行った。

安倍委員より、共創力強化インターンシップ、経済的支援など、プログラムの特徴に感銘を受けたことが述べられた上で、他分野との共創に特に重要な数学の分野をカバーできる講義形式の科目を新設する予定について質問があった。Hosking委員からは、現在産業界において、統計学・最適化・機械学習モデル全般・ディープラーニングモデルが注力分野であり、インターンシップなどを通して得た実践的な知識は、数学の学生が産業界でより重宝されるために非常に重要である旨説明があった。その上で、学生が分野横断的に数学に触れ、産業界のインターンシップに参加できる本プログラムの取り組みに対して高い評価が示された。浜口委員より、純粋数学者と応用数学者の違いについて発言があり、今後純粋数学者である学生の教育手段について考える必要がある旨意見があった。また、本プログラムの最終目標について明確に設定すべきという意見もあった。これに対しプログラムコーディネーターより、プログラムを通して、社会において数学を本質的に活用し、イノベーションに繋げられる人材を育成することを目標としている旨説明があった。また、社会的に数学が重要視されている一方で、日本において数学的資質をもった人材が不足していることを挙げ、数学者がもっと受け入れられるように社会を変えていく必要がある、それには時間を要する旨発言があった。浜口委員からはまた、プログラム終了時に、産業数学を教えるカリキュラムなど、具体的な何かを構築することで、今後他大学の指標となれるのではないかという意見もあった。

このように有益な助言を得ることができ、今後のプログラムの活動の指針となる、大変有意義な会議となった。



長田プログラム責任者



佐伯プログラムコーディネーター



Hosking 委員



浜口委員



安倍委員



III 活動記録

卓越大学院プログラム 委員現地視察

日 時: 2021年11月12日(金) 13:15~17:14

場 所: Web開催

出席者: 卓越大学院プログラム委員会審査・評価部会 現地視察担当委員 3名

プログラムオフィサー 山田 道夫(京都大学数理解析研究所 特任教授、名誉教授)

理事・副学長 谷口 倫一郎理事

大学院数理学研究院 長田 博文研究院長(プログラム責任者)

マス・フォア・インダストリ研究所 佐伯 修研究所長(プログラムコーディネーター)

マス・フォア・インダストリ研究所 白井 朋之教授

マス・フォア・インダストリ研究所 梶原 健司教授

マス・フォア・インダストリ研究所 溝口 佳寛教授

大学院システム情報科学研究院 竹内 純一教授

大学院経済学研究院 大西 俊郎教授

大学院経済学研究院 小室 理恵准教授

本プログラムの進捗状況の把握及び確認等を行うことを目的として、令和3年度の現地視察が、令和3年11月12日(金)午後、卓越大学院プログラム委員会審査・評価部会の現地視察担当委員3名により、オンライン形式で実施された。(なお、現地視察は、採択2年度目と、4年度目の中間評価直後の5年度目に行われることになっているもので、プログラム評価の流れの中では非常に重要なものとなっている。)今回は、プログラムオフィサーの山田道夫先生も同席し、本学からは谷口教育担当理事をはじめ9名が出席した。

まず、谷口理事から大学としての卓越大学院プログラムの位置づけなどについて説明があったあと、プログラムコーディネーターからプログラム概要の説明があり、そのあとで3人の委員からの質疑に答える形で進んでいった。休憩をはさんだあと、教員は退出し、プログラム学生と委員との間で意見交換が行われた。その後、教育現場・施設等の視察へと進んだが、今回はオンラインということもあり、施設や学生の活動の様子等を撮影した動画をあらかじめ準備し、それをプログラムコーディネーターが解説することをもって視察とした。そして最後に、委員の皆様からの講評と、出席者との自由討議が行われた。

終了後、ほどなくして正式な現地視察報告書が卓越大学院プログラム委員会から届いたが、評価結果は概ね良好で、総長をトップとするガバナンス強化のもと、総合知による価値創造人材、課題解決型人材育成のための大学院強化を進めており、本プログラムはその先導的プログラム、及び最重要大学院プログラムに位置付けられているほか、プログラム責任者及びプログラム担当者は熱意を持って取り組んでおり、採択時の留意事項や参考意見に対しても真摯に対応しており、本プログラムの実施・運営体制の構築は着実に進んでいるといった評価を得た。その一方で、修士課程の学生については、負担が大きいとの指摘もあったほか、英語科目については会話能力の向上を目的にするのであれば、海外大学との、オンラインあるいは対面での研究ワークショップなどで鍛えるといった方策もあり、アカデミック英語能力の拡充に注力すべきといったご意見も頂戴した。

今回は幸いにして、本プログラムの特長的側面を委員に素直に評価していただくことができた。今後は、いただいた意見に対して、改善策を早急に講じてプログラムをさらに良くするべく、プログラム担当教員を中心に努力してゆきたい。

卓越大学院プログラム プログラムオフィサー現地訪問

令和2年度

日 時：2021年3月26日(金) 14:00～16:40

場 所：Web開催

出席者：プログラムオフィサー 山田 道夫(京都大学数理解析研究所 特任教授、名誉教授)

大学院数理学研究院 長田 博文研究院長(プログラム責任者)

マス・フォア・インダストリ研究所 佐伯 修研究所長(プログラムコーディネーター)

マス・フォア・インダストリ研究所 白井 朋之教授

マス・フォア・インダストリ研究所 梶原 健司教授

マス・フォア・インダストリ研究所 溝口 佳寛教授

大学院システム情報科学研究院 竹内 純一教授

大学院経済学研究院 瀧本 太郎教授

プログラムオフィサー(以下、POと略記)は、担当するプログラムのプログラムコーディネーターと連携を保ちつつ、実施大学を訪問し、プログラム生との対話を含め、プログラムの進捗状況を確認するとともに、相談、助言等のケアを行うことになっている。その活動の一環として、令和3年3月26日に、オンライン形式により第1回のPO訪問が実施された。

まず出席者の紹介のあと、(卓越大学院プログラムとの関連での)九州大学の概要説明がプログラムコーディネーターからあり、POとの質疑応答が行われた。その後、コーディネーターからプログラムの概要と進捗状況について、説明があり、その後再度、POとの間で意見交換が行われた。そして最後に、POからのまとめが行われた。

大学概要については、研究科等連係課程や、学位についての質疑応答が行われた。その後、プログラムの概要や進捗状況については、産業数学の体系化、10年後の課題にどう向き合うのか、といったことについての議論がなされたほか、学生や教員の負担感についての質疑応答も行われた。また、最後にPOの会合で言及されたという卓越大学院プログラム全体に関する問題点や、コロナ対応などの課題について共有していただき、質疑応答を終えた。

今回のPO訪問は初めてということ、そしてプログラムとしての実質的な活動がまだ始まっていないということもあり、基本的にお互いの自己紹介と、本プログラムの概要についてのおおまかな意見交換を中心に行った。

令和3年度

日 時：2022年3月22日(火) 9:17～12:25

場 所：Web開催

出席者：プログラムオフィサー 山田 道夫(京都大学数理解析研究所 特任教授、名誉教授)

大学院数理学研究院 長田 博文研究院長(プログラム責任者)

マス・フォア・インダストリ研究所 佐伯 修研究所長(プログラムコーディネーター)

大学院数理学研究院 辻井 正人教授

マス・フォア・インダストリ研究所 白井 朋之教授

マス・フォア・インダストリ研究所 梶原 健司教授

マス・フォア・インダストリ研究所 溝口 佳寛教授

大学院システム情報科学研究院 竹内 純一教授

大学院経済学研究院 大西 俊郎教授

第2回目のプログラムオフィサー(以下、POと略記)による現地訪問が、令和4年3月22日(火)に、オンラインにて行われた。出席者は、POのほか、本学から8名であった。まず、開催に先立ち、POの山田先生から、今回のPO現地訪問は、評価という

III 活動記録

のではなく、プログラムの着実な目標達成のための相談の場であり、コロナ禍で様々な取組が制限される中でどのように教育の質の維持を図ったか、また中間評価にも備えて、本事業の大学院全体への波及・展開や方向性等について、本日は意見交換を行いたい、との発言があった。続いてプログラムコーディネーターから、プログラムの進捗状況等の説明があり、その後質疑応答が行われた。連係学府、学位、MFF審査委員会、修士課程の学生の負担、経済的支援、プログラミング教育、などが主なテーマであった。その後プログラム学生2名(修士課程2年次生)から自身の研究についてのプレゼンが行われ、POとの間で質疑応答が行われた。最後にPOからまとめがあり、令和3年11月の現地視察時の指摘事項に関して、大きく改善が進んでいる印象を受けた、といったコメントをいただいた。数学のプログラミング修得に関しては、新型コロナウイルスの影響があるのではないか、といった指摘もあり、コロナ禍が終息してくれば、問題は自然に解決されるのではないかという感想もいただいた。

概してPOの評価は肯定的なものが多く、今後もいただいたPOの意見や助言を取り入れる形で、プログラム担当教員が協力して、本プログラムを改善してゆきたいと考えている。

卓越社会人博士課程制度

卓越社会人博士課程制度は、学生の経済的支援・キャリア形成といった、日本の博士課程進学者数の伸び悩みの主な原因の解決に加え、産学連携の優れたモデル作りに資するため、本プログラムと企業等が一体となって、博士人材を育てることを目的とする日本初の制度である。本制度の概要は、修士課程修了後ただちに若しくは博士後期課程1年次終了後ただちに、本制度において本プログラムと連携する企業等に就職し(ただし、博士後期課程の在学者にあっては、企業等との折りがあれば年度途中であっても制度利用可能)、就職と同時に企業等に籍を置きながら、博士後期課程に進学又は在学する、というものである。

令和3年度は、富士通株式会社富士通研究所との連携により本制度を実施し、1名が令和4年度より富士通株式会社富士通研究所に就職し、本学に社会人博士課程学生として在籍することになっている。

令和4年度も、富士通株式会社富士通研究所との連携により本制度を実施する予定であり、今後は本制度への協力企業の増加を目指す。

修士課程修了後、企業が採用、同時に社会人として博士後期課程に進学

- 経済的支援、キャリア構築、産学連携強化、大学・企業間人材往還促進等、複数の課題が一挙に解決
- 富士通株式会社富士通研究所を中心に連携実績のある他企業とも協力、本卓越大学院で日本初の制度化
- 毎年1～2名に制度適用を目指す



Prelims (進学資格審査)

Prelimsは修士課程修了時の進学資格審査で、修士論文の審査に合格した学生を対象に、口頭発表(20分)および質疑応答(20分)により、所属学府の学術基盤および修士論文の学術的な達成度、プレゼンテーション能力、今後3年間の研究・活動計画などを評価し、これとコースワークの絶対評価による成績を総合して数学力、統計力、モデリング力、共創力および基本的な創発力の到達度を判断し、博士後期課程への進学を審査するものである。

令和3年度は、数理学府から2名、システム情報科学府から2名(両学府のマス・フォア・イノベーション卓越大学院コース所属学生)の計4名に対して、令和4年3月3日にPrelimsをオンラインで実施した。審査にあたっては、数理学府、システム情報科学府、経済学府のプログラム担当者から各1名ずつ、プログラム担当者以外の教員1名およびプログラム責任者が必要と認めた者1名～2名によりマス・ファイブ・フォース(MFF)審査委員会を組織し、多角的な視点から学生の審査を実施した。各審査委員が上述の評価項目に対して5段階評価で査定を行い、平均3点以上を合格の基準とし、4名全員を合格と判定した。また、Prelims合格者は、本審査結果を以て、令和4年4月設置の大学院マス・フォア・イノベーション連係学府博士後期課程入試に合格と認定した。

英会話学習サポート

本プログラムでは、将来研究を進めていくうえで、『英語』は欠かせないものであるという趣旨の下、海外インターンシップや海外留学を推奨しており、そのための準備として、無料で参加できる独自の英会話学習サポートを導入した。本プログラムが導入した英会話学習サポートは、講師にネイティブの方、バイリンガルの方を迎え、少人数制(1クラス当たり6名程度)で実施し、「Reading」「Listening」「Speaking」「Writing」の4技能をバランスよく鍛えるものである。

今後1、2年の間に海外インターンシップに行く可能性が高い博士後期課程1年生については、個別の支援体制を強化し、各学生に適したサポートを提供した。

さらに、プログラム生全員が利用できる「E-learning」を導入することにより、移動中等の隙間時間に活用できる環境を整えた。

委託先機関 株式会社 アルクエデュケーション

受講対象者 マス・フォア・イノベーション卓越大学院プログラム全コース生

令和3年度カリキュラム

Class (クラス)	Curriculum (カリキュラム)			
Basic	Global Application ※ネイティブ講師が担当	Rhythm & Beat (8コマ)	Creative Speaking (8コマ)	Academic English (24コマ)
Intermediate +α		Rhythm & Beat (8コマ)	Creative Speaking (8コマ)	Academic English (24コマ)
D1 Students	個別サポート (1回30分×30回) ※ネイティブ講師が担当			
All Students	E-learning (ALC NetAcademy NEXT 英単語パワーアップコースTOEFL テスト編)			

III 活動記録

実績

英語研修受講前と受講後に株式会社アルクエデュケーションの『TSST-英語スピーキングテスト-』を活用し、学生の英語力を測定した。

『TSST-英語スピーキングテスト-』とは、ペーパーテストでは測定できない、英語スピーキング能力を把握するためのテストである。自分の考えを「その時」「その場で」瞬時に話し伝える能力＝英語運用能力を判定する。

テストは電話で実施し、全部で10問出題され、100～995点のスコア(5点刻み)で結果が出る。

特にスコアの上昇が著しかった学生の結果は下表の通り。

令和3年10月受験	令和4年2月受験	スコア変移
A氏 435点	575点	140点UP
B氏 470点	560点	90点UP
C氏 335点	420点	85点UP
D氏 475点	540点	65点UP
E氏 415点	475点	60点UP

学生の声

*カリキュラム終了後、株式会社アルクエデュケーションが実施したアンケートより引用

トレーニングを通してリスニングのしやすさがアップすることが実感でき、とても良かったです。

このトレーニングを継続してやればリスニング力がアップすると思うのですが、やはり一人でのシャドーウィングはモチベーションが湧かないので、もっと長い期間の授業でトレーニングが受けられると良かったなと思いました。

また自宅で単語の学習をしながら思ったことですが、キクタン【Reading】のAppを受講生が使用できたら良いなと思いました。



今年度の課題等

今年度の反省点として、英語研修を行う前の学生への動機付けが十分ではなかったことが挙げられる。英語研修を行った趣旨、また、今後研究者として英語が欠かせないことに対する意識づけが十分ではなく、その結果、一部の学生の出席率が芳しくなかった。

上記反省点を踏まえ、来年度は、英語の重要性を理解し、参加に対する意志を持って研修に参加してもらうため、英語研修の開催前に動機付けを目的とした説明会を行い、受講対象である学生に参加希望の有無を確認した上で英語研修を開催することとした。

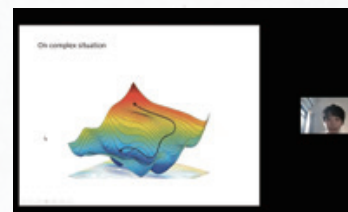
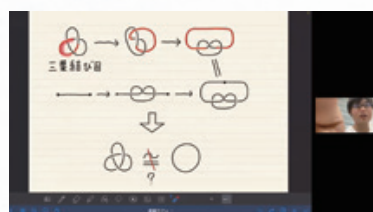
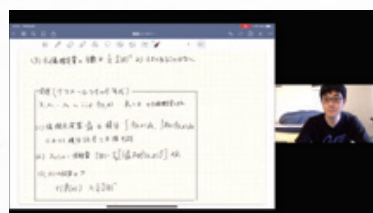
マス・フォア・イノベーションカフェ

ヤングメンターの主催で本プログラムの教員や大学院生、さらには本プログラムに関心を持つ学部生(他分野も含む)にも参加してもらい、数学をテーマにした研究内容を分かりやすく紹介し、様々な視点からの意見交換を行いながら、交流を深めることを目的に企画されたのがマス・フォア・イノベーションカフェである。お茶やお菓子を楽しみながら懇談する時間を設ける予定だったが、新型コロナウイルスの影響により断念せざるを得ず、講演のみが実施された。

講演は主に2つのタイプがあった。1つ目はプログラム生の自己紹介および研究内容紹介で、年度の初めに行われた。これにより教員、ヤングメンターがプログラム生について知ることができ、また学生同士の交流も深まり、懇談の代わりとなった。2つ目は企業や大学で数学の応用研究に取り組まれている方の講演で、応用分野で実際に活躍されている方の話が聞ける貴重な機会となった。

前年度末に開催された準備企画も含めると、マス・フォア・イノベーションカフェは17回にわたり開催された。新型コロナウイルス対策のためほとんどがオンライン開催となったが、プログラム生のことを知り、数学の応用に関する知見が得られる有意義な場となった。

本年度のカフェは、その名前にも関わらず講演を聞くばかりとなり交流が満足にできなかった。来年度は、新型コロナウイルス対策をしながらも交流を深められるよう、新たな企画に取り組むたいと考えている。



マス・フォア・イノベーションセミナー

マス・フォア・イノベーションセミナーは他分野への応用に取り組んでいる数学者や、数学を応用している数学以外の研究者の方に講演していただくセミナーである。プログラム生が主体となって運営し、ヤングメンターがサポートする体制となっている。プログラム生が候補者を選び講演依頼をし、会場の準備や当日の司会を担当する。

本年度のセミナーは8回にわたり開催され、東京大学や名古屋大学、東北大学など色々な大学の研究者の方に講演いただいた。講演分野も様々で、機械学習やネットワークなど多岐にわたった。プログラム生自身が興味のある分野の専門家を選び、直接、講演依頼をし、当日の運営まで経験ができる有意義なセミナーとなった。

セミナーの他にも特別企画としてPre-Math-for-Innovation Workshopが開かれた。この企画では本プログラムに所属する大学院生や若手研究者などが自分の研究についてポスター形式での発表を行った。これによりお互いの研究に関して理解を深め合うことができた。

III 活動記録

学生満足度調査アンケート

本プログラムでは、プログラム生としての満足度や疑問点等について調査を行うため、「学生満足度調査アンケート」を、令和3年度前期・後期の計2回実施した。アンケートでは、学生生活に対する満足度に加え、3学府が連係したプログラムであること、また、本プログラムの特徴的な科目である「数学共創モデリング」に対して学生が実際に感じている生の声をヒアリングし、次年度以降のプログラム運営に反映することを目的として行った。なお、アンケートは公平性を保ち、よりリアルな学生の意見を得るため、匿名で実施した。アンケートでは、経済的支援に対する不満等も見受けられたが、プログラム生としての満足度は概ね良好であった。次年度以降のプログラム運営体制の改善に繋げるため、アンケート実施後、プログラム関係者へアンケート結果について周知を行った。

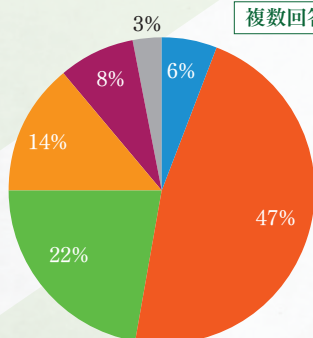
第1回 学生満足度調査アンケート結果

実施時期：令和3年8月

回答者数：18名（対象：プログラム生 全20名）

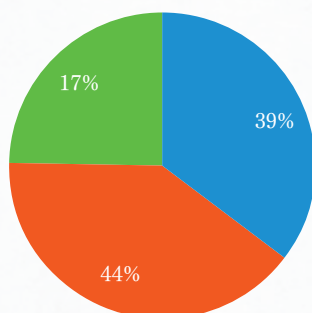
1. マス・フォア・イノベーション卓越大学院コースを選んだ理由について教えてください。

複数回答可



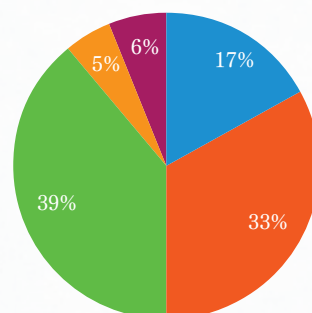
2. 指導教員等との個別の会話や、相談はできていますか？

単一選択



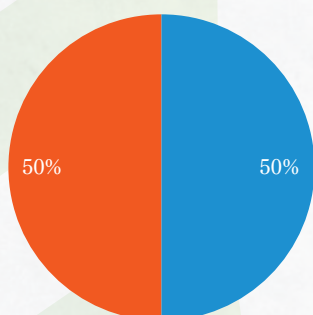
3. ヤングメンターとの個別の会話や、相談はできていますか？

単一選択



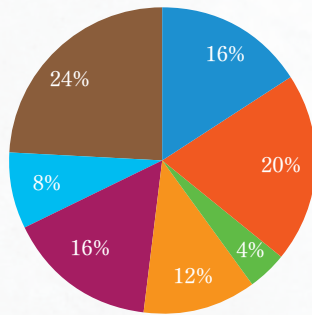
4. 現在、悩みや不安はありますか？

単一選択



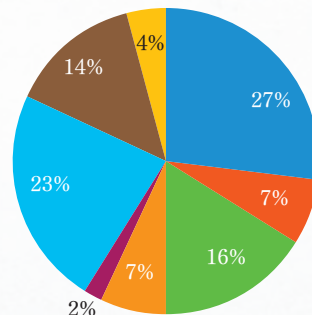
5. 上記で「ある」と答えた方に伺います。それはどんなことですか？

複数回答可



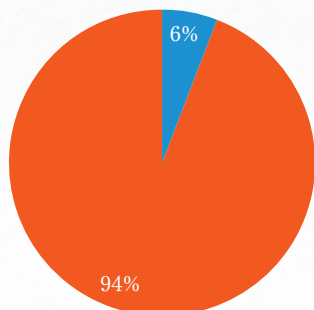
6. 不明なこと、困ったことを相談できる人はいますか？

複数回答可



7. 学校生活で困ったことはありますか。

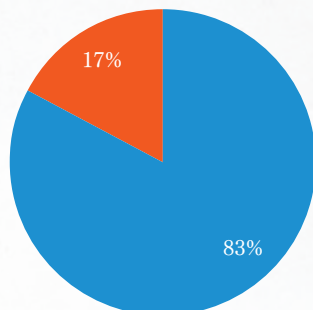
単一選択



■ ある 1
■ ない 17

8. 単位の取り方についての説明はどうでしたか？

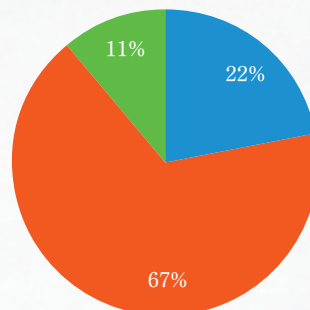
単一選択



■ 理解できた 15
■ あまり理解できなかった 3
■ わからなかった 0

9. 学習、研究の時間はとれていますか？

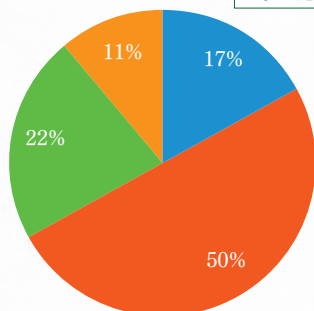
単一選択



■ 十分取れている 4
■ 取れている 12
■ 取れていない 2
■ 全然取れていない 0

10. マス・フォア・イノベーション卓越大学院コースの
教育内容についてどのくらい満足していますか？

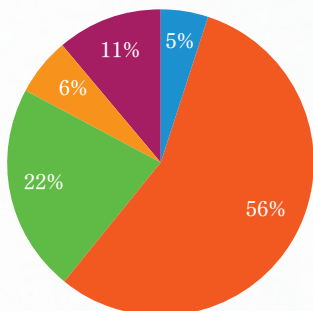
単一選択



■ 満足している 3
■ どちらかといえば満足である 9
■ どちらともいえない 4
■ どちらかといえば不満足である 2
■ 不満足である 0

11. 経済的支援について、どのくらい満足していますか？

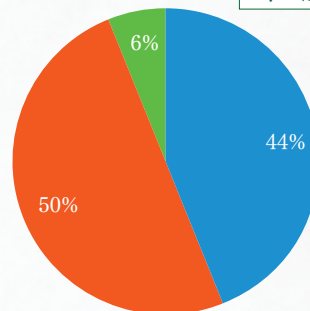
単一選択



■ 満足している 1
■ どちらかといえば満足である 10
■ どちらともいえない 4
■ どちらかといえば不満足である 1
■ 不満足である 2

12. マス・フォア・イノベーションカフェ（セミナー）に
ついて、どのくらい参加していますか？

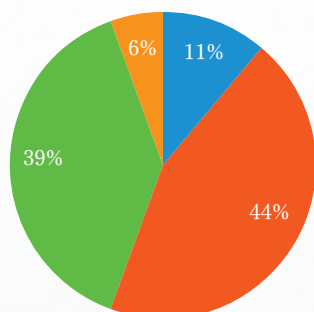
単一選択



■ 比較的参加している 8
■ 時々参加している 9
■ あまり参加していない 1

13. マス・フォア・イノベーション卓越大学院コースは
後輩に勧めたいですか？

単一選択



■ ぜひ勧めたい 2
■ 勧めたい 8
■ どちらでもない 7
■ 勧めない 1

III 活動記録

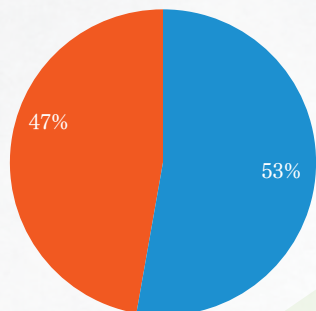
第2回 学生満足度調査アンケート結果

実施時期：令和4年4月

回答者数：17名（対象：プログラム生 全20名）

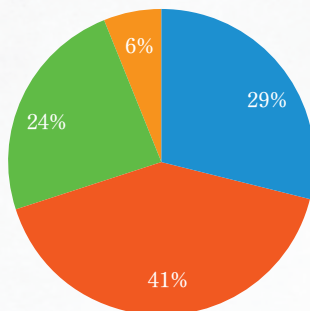
1. 指導教員等との個別の会話や、相談はできていますか？

単一選択



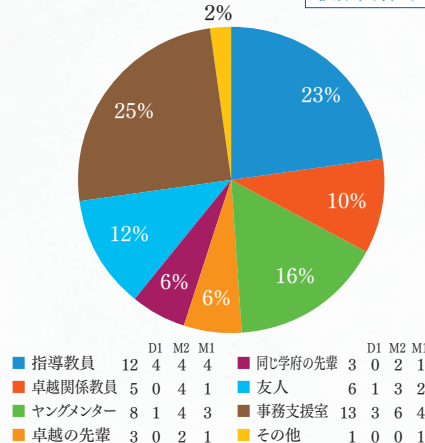
2. ヤングメンターとの個別の会話や、相談はできていますか？

単一選択



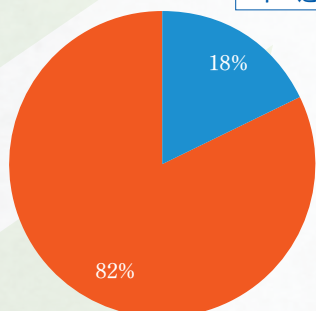
3. 不明なこと、困ったことを相談できる人はいますか？

複数回答可



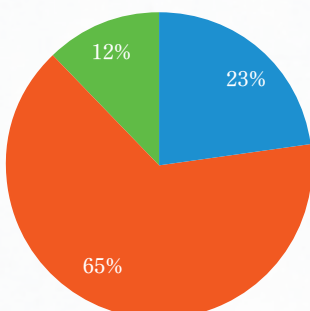
4. 学校生活で困ったことはありますか。

単一選択



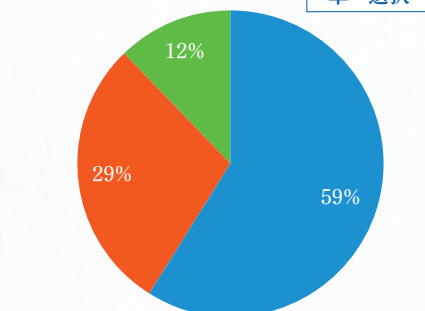
5. 学習、研究の時間はとれていますか？

単一選択



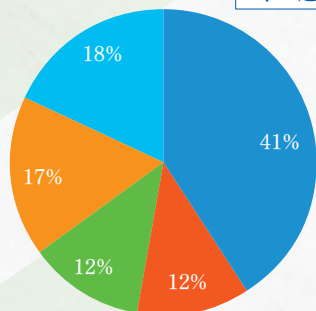
6. マス・フォア・イノベーション卓越大学院プログラムコースの教育内容についてのくらい満足していますか？

単一選択



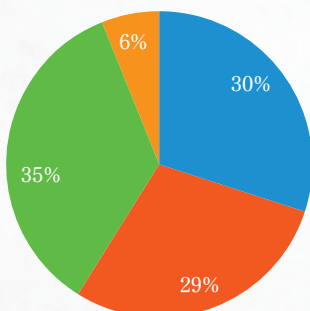
7. 講義等でわからないことがあったとき、質問できる人はいますか？
いる場合、それは誰ですか？

単一選択



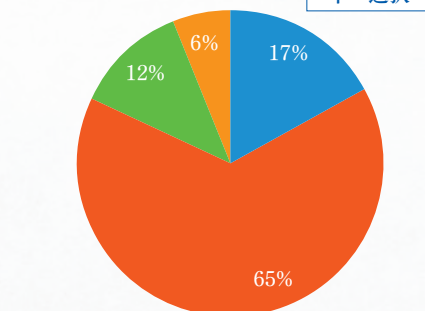
8. プログラミングスキルが身についてきていると自分自身で感じますか？

単一選択



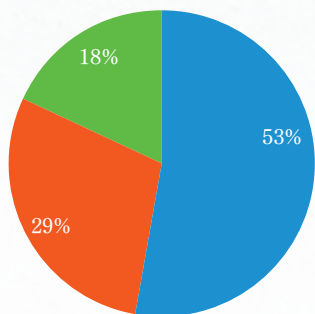
9. 経済的支援について、どのくらい満足していますか？

単一選択



10. 英語研修をやってよかったと思いますか？

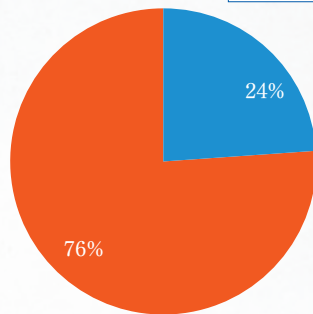
単一選択



	D1	M2	M1
■ やってよかった	9	2	3
■ どちらかというとやってよかった	5	2	1
■ 特に行わなくてよかった	3	0	2

11. マス・フォア・イノベーションカフェ(セミナー)について、どのくらい参加しましたか？

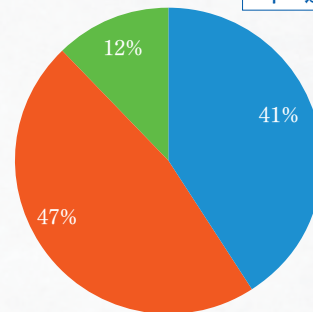
単一選択



	D1	M2	M1
■ 比較的参加している	4	1	0
■ 時々参加している	13	3	6
■ あまり参加していない	0	0	0

12. 数理学府、システム情報科学府、経済学府等の学生に比べて、マス・フォア・イノベーション卓越大学院プログラムコース生(連係学府生)は忙しいと感じますか？

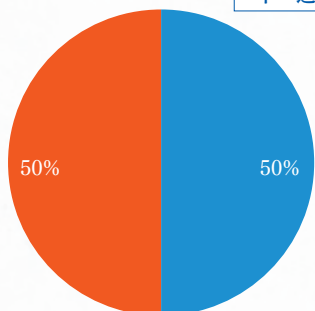
単一選択



	D1	M2	M1
■ 忙しい	7	1	5
■ どちらかといえば忙しい	8	3	1
■ どちらかといえば忙しいと感じない	2	0	0
■ 忙しいと感じない	0	0	0

13. 上記で「忙しい」「どちらかといえば忙しい」と答えた方に伺います。やりがいを感じていますか？

単一選択

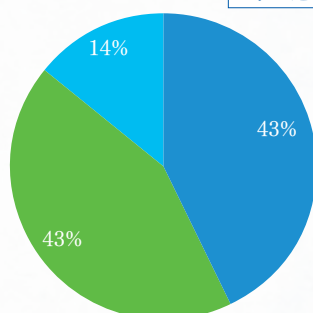


	D1	M2	M1
■ やりがいを感じている	7	2	2
■ 改善してほしい	7	1	3

該当者は15名(「忙しい」:7名、「どちらかといえば忙しい」:8名)であるが、回答は14件であった。

14. システム情報科学府、経済学府のコース生に伺います。自身の研究テーマにおいて、数学的にわからないこと、知りたいことが出てきたとき、質問できる人はいますか？いる場合は、それは誰ですか？

単一選択

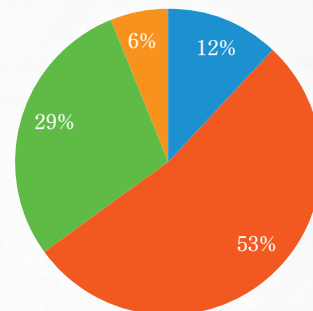


	D1	M2	M1
■ 指導教員	3	1	2
■ 共創メンターの教員	0	0	0
■ ヤングメンター	3	0	2
■ 友人	0	0	0
■ その他	0	0	0
■ いない	1	0	0

システム情報科学府コース生(5名)、経済学府コース生(1名)の学生は6名であるが、回答は7件であった。

15. マス・フォア・イノベーション連係学府は後輩に勧めたいですか？

単一選択



	D1	M2	M1
■ ぜひ勧めたい	2	0	1
■ 勧めたい	9	2	2
■ どちらでもない	5	2	2
■ 勧めない	1	0	1